懐疑的宣言

岸田國士

この二三年来、私の読んだもののうちで、ジユウル・ルナアルの日記ほど、私の心を動かしたものはない。私は決して、彼を所謂「偉大な作家」だと思つてはゐなかつた。しかし、これほどまでに「人間の小ささ」を悉く具へてゐる男だとも思はなかつた。私はこの日記を繙くに当つて、忽ち眉を寄せ、脇の下に汗をさへかいた。その偏狭さ、傲慢さ、嫉妬深さ、名声への卑俗な執着、病的なエゴイズム……彼は、誠に、憫笑に値する人物である。ところが、これらの「醜さ」を暴露しつゝ、その「醜さ」の陰に、燦然と光るものを覗かせてゐる。私は、思はずホツとした。彼は、人が自

分に向つて云ふべきことを、自ら自分自身に言つてゐる。しかも、その態度には、懺悔風の女々しさもなく、露悪的衒気もない。彼は、そこではじめて持ち前の「正直さ」を発揮してゐるのだ。そして、その「正直さ」が、運命的とさへみえるところに、この日記全巻に漲る「恐ろしさ」があり、人間ルナアルの不思議な魅力が潜んでゐるやうに思はれる。

　自ら「小作家の頭目」を以て任じ、音楽と美術には縁なき衆生と公言し、人間、わけても自分の母親を嫌ひ、社会主義に楯つきながらジヨオレスを愛し、自然派の仲間に入れられながら、ユゴオとロスタンを讃美

し、裕かだと思はれるから貧乏をし、健康さうにみえて、実は病苦に悩んでゐる彼を思ふと、私は、こゝに再び、最も愛すべく親しむべき一人の作家を見出すのである。レオン・ドオデの言葉の如く、彼こそ、あらゆる意味に於て「小ささ」による「偉大さ」への道を示し得たユニツクな作家だ。

四巻に亘る日記は、彼の死後十五年、その全集の刊行と同時に出版されたもので、日記兼ノートといふ風変りな形をとつてゐる点、殊に、赤裸々に自己解剖と容赦なき周囲への悪罵に満ちてゐる点で、最近、仏国文壇のセンセイシヨンを捲き起した。ある批評家の如

きは、この日記こそ、ルナアル全集中の最大傑作なりと叫んだくらゐである。日記の日付は、一八八七年六月、彼が二十三歳の時から始まり、一九一〇年四月、臨終の一と月前に終つてゐる。何れ、完訳したいと思つてゐるが、こゝでは第一巻の中から、少しばかり見本をお目にかけておかう。

一八八八年十一月十五日

友達といふものは着物のやうなものだ。摺り切れる前に脱いだ方がいゝ。さもないと、向ふから離れて行く。

十二月二十九日

如何に多くの人間が自殺を思ひ立ち、そして写真を破るだけで満足したことか。

一八八九年四月四日

ユイスマンス作「ヴアタアル姉妹」。これは亜鉛（ブリキ）のゾラ、擬ひの自然主義だ。

四月十日

ブウルジユワを唾棄するのはブウルジユワ的だ。

五月二十九日

人間！　あゝ、もう小便が出たくなる。

一八九一年三月七日

おれはなんにも読まない。いゝものにぶつかるのが

怖いので。
おれの微笑は黄疸にかゝってゐる。
一八九六年八月（日付なし）
おれは、素人劇作家の劇しか好まない——ミユツセ、バンヴイル、ゴオチエがさうだ。サルドウウ、オオジエ、デユマ、これなら、寝床の方がましだ。
十一月九日
毎日つけてゐるこのノートは、おれが何時か書くかも知れぬ「碌でないもの」を、無事に「堕すこと」だ。
十一月十六日
制作劇場で、「ペエア・ギユント」を観る。

悲嘆のあまり、ナウは自殺しようとする。此処でするのはよしてくれ。おれがゐなくなつてからやつてくれ。善し悪しは別として、フランス精神といふものは、兎に角あるのだ。われわれの誰が、若し書けたとしても、イプセンの戯曲を書く勇気があるだらう。（中略）

われわれも亦、われわれの「ファウスト」を書かうかと思ふことがある。しかし、われわれは、そこで踏み止まるのだ。北方の人間は踏み止まらない。彼は、一人のブウルジユワを、自由に酔ふ囚人に仕上げる。（中略）

フランス精神は、「大きなこと」を愛しはする。しか

し、それが自分を何処へ連れて行くかを見ようとする。傑作の覘ひをそこにつけるのだ。

あゝ、如何に多くの天才が、おれに「一撃」を与へたことか。おれの頭は、もう割れてゐなければならない筈ではないか。

おれは、おれのあらゆる苦悩を賭して、他人に完全な静謐を与へようとするのだ。

十二月一日

あゝ情けない。おれはもう下手に書くことができなくなつた。

それはもう批評をするわけに行かぬ。蔭でおれを褒

めてゐる作家達を、一た言目には怒らしてしまふだらう。

底本：「岸田國士全集21」岩波書店
　　　1990（平成2）年7月9日発行
底本の親本：「読売新聞」
　　　1930（昭和5）年2月15日
初出：「読売新聞」
　　　1930（昭和5）年2月15日
入力：tatsuki
校正：門田裕志
2007年11月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。